☆年間第33主日（11月15日）の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（箴言　31 章 10～13, 19～20, 30～31 節）

有能な妻を見いだすのは誰か。真珠よりはるかに貴い妻を。
夫は心から彼女を信頼している。儲けに不足することはない。
彼女は生涯の日々夫に幸いはもたらすが、災いはもたらさない。
羊毛と亜麻を求め手ずから望みどおりのものに仕立てる。
手を糸車に伸べ、手のひらに錘をあやつる。貧しい人には手を開き、
乏しい人に手を伸べる。あでやかさは欺き、美しさは空しい。
主を畏れる女こそ、たたえられる。彼女にその手の実りを報いよ。
その業を町の城門でたたえよ。

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙Ⅰ　５章１～６節）

兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。

しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるのではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。

従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。

福音朗読　（マタイよる福音書　２５章 １４～３０節）

そのとき、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた。

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、

僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。

早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　秋晴れの素晴らしい天気が続いています。教会の典礼は年間の終わりに近づいています。今日は思い出すべき二つのことがあります。一つは、「貧しい人のための世界祈願日」だということ、そしてもう一つは今日15日から始まる一週間、22日まで、聖書週間ということです。現在、世界ではその日生きてゆくための衣食住に事欠いている人たちが多くいます。貧しければ心の状態も貧しくなりやすいものです。イエスは全生涯を通して貧しく生きられました。イエスのその生涯に倣った多くの聖人たち、殉教者たちもこの貧しさを基本において生きていました。私たちは自分の持てるものを貧しい人たちと分かち合うことによって、神より多くの霊的・物的な恵みを受けることができるのです。貧しい人たちのために祈るとともに、その生活を支える援助を具体的に行いましょう。また今日から始まる一週間は聖書週間です。聖書は神からの私へのメッセージです。手紙です。手にとって読むことが大切です。書棚においておくのではなく、開いて読みましょう。この一週間は意図的に手にとって読みましょう。どこからでも結構です。

第一朗読　（箴言　31 章 10～13, 19～20, 30～31 節）

　夫と妻についての考え方が多様化している現代ですが、変わらないのは家庭での夫と妻の在り方つまり「信頼」ということだと思います。そして、「貧しい人には手を開き、乏しい人には手を伸べる」ことが二人の間を強く結びつける。それは「主を畏れることは知恵の初め」だと知っているからです。聖書のこの個所ではそのように生きた女性、妻が描かれていますが、妻だけがそうであったわけではないと思います。同じ価値観、信仰を持っていることが前提になっているのです。今日の世界祈願日の「貧しい人への心」が二人を結び付けているのです。

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙Ⅰ　５章１～６節）

パウロの時代は主の日がいつ来るかということが一つのテーマになっていたようです。ですからパウロはその日が突然来ても慌てふためかないように準備しておくことが大事だと訴えています。今の教会の典礼もちょうど終末のことがテーマになっています。主の前に出るときに目を覚ましているようにしましょうと訴えています。目を覚まして、身を慎んでいましょう。そして、自分の救いだけにとらわれていないで、私たちの助けを必要としている人たちに手を伸べること、愛の実践を行うことが主を待つ人の姿勢なのです。

福音朗読　（マタイよる福音書　２５章 １４～３０節）

今日の福音は先週の福音に続いています。主の到来を待つ間の過ごし方がテーマにあります。神から任されたものをどう生かすかです。この「任されたもの」にはいろいろあります。生まれ、性別、時代、地域、才能、時間などたくさんあると思います。自分で気づいているものと気づかずにいるものもあるでしょう。またこれらの物を何のために使うかも問題であるかもしれませんが、それは神の意に沿ったものということになるでしょう。今日の主日のテーマで考えれば、自分のためよりは私の助けが必要な人に対してこの「任されたもの」を使うことだと思います。また聖書では「商売をして・・儲けた」とあります。商売には多少の勇気が必要です。五タラントンいただいた人は商売のすべてが順調だったわけではないでしょう。失敗もあったでしょうが、それらの「任されたもの」を恐れず他の人の必要のために使った結果、もう五タラントンを勝ち得たのです。一方、一タラントンをもらった人は失敗することを恐れるあまり、地面に隠しておいたのです。主人は隠しておいた人を怠け者として退けてしまわれます。これは自分のものを他人のために使うことを恐れている人の姿ではないでしょうか。私たちの物的財産は神の前に何の価値もないのです。それを生かす道は、他の人のために使うことなのです。恐れずに捧げましょう。

聖書週間にちなみ、この一週間は聖書を手に取って読みましょう。カトリックの人は聖書を大事にしていないといわれています。それは「聖書中心主義」と言われているプロテスタントの人に対する反発・偏見のようなものから来ているのではないでしょうか。しかし、聖書を読まないと神を知ることができません。神を愛する人が神からの手紙を読まないことはあり得ないでしょう。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光